アフリカ在来有畜農業の可能性に関する研究

――エチオピア高地における人－ウシ関係に着目して――

平成 19 年入学
参加したフィールドスクール：ネパール
調査国：エチオピア
田中　利和

キーワード：エチオピア高地、牛耕、有畜農業、犂、オロモ

自身の研究テーマについて

エチオピア中央高原付近に暮らすオロモの人々は、伝統的に農業と家畜の飼養とを結び付け、限られた土地で自給生産的な有畜農業をおこなってきた。彼らにとってウシは非常に重要な生活資源である。例えば去勢牛は、畑の犂耕作業や、収穫した穀物の脱穀(写真 1)をおこなう際に必要不可欠である。雌牛が提供する乳製品は人々の食文化を支える重要な食品である。また人々にとって貴重な動物性タンパク質も提供している。牛糞は畑に有機物として還元されたり、天日干しして薪の代替燃料として利用(写真 2)したりもする。さらには、建築資材として用いられるほか、床を補修する材料としても利用されている。エチオピアの農村研究においては、ウシの所有頭数が経済的な豊かさの指標としてもちいられることも多い。このようにウシは、オロモの人々の生活に深く関わっており、多面的な役割を果たしている。

本研究の目的は、人々と家畜との間にみられる様々な関係に焦点をあて、在来の有畜農業システムを畜産学、農学、歴史学、人類学等さまざま視点から総合的に検討し、包括的に理解することである。同時にその特性を明らかにすることを目指し、エチオピアの人々が培ってきた在来の知識・技術を内発的発展や生業活動の観点から調査することによって、アフリカ型有畜農業システムの可能性を検討することを目指す。

写真 1. テフの脱穀の様子

写真 2. 糞を燃料にするため天日干しにする

フィールドスクールから得られた知見について

今回フィールドスクールに参加する際、地域研究がどのような形で社会開発につながる可能性があるかという点に関心を抱いていた。ネパールフィールドスクールで訪れたピンタリ村では、現地住民、開発実務者、そして地域研究者が、村でのホームステイやディスカッション(写真.3)、そして農作業などの参与観察を通してお互いの視点からの意見交換を行った。

彼らとの対話の中で「将来はどんな夢を抱いているのですか？」と質問したとき、ある一人の女性は質問に対し「村には内戦の傷あとや、がけ崩れの問題など様々な問題がある。そのような問題を解決し、苦労など少ない安心した生活をおくりたい」と答えた。その返答に含まれていたものは、現状に対しての悲観的な態度ではなく、明るく、ひたむきに問題などに取り組んでいこうというものであった。

このように、現場で人々と対話をかさねあうなかで、地域住民のポジティブな姿勢を含め地域を把握することができることこそがフィールドスクールの醍醐味であると感じた。そして、地域住民だけではなく、実務者、他の地域研究者と多様な視点を共有できるという点に本スクールの意義を感じた。また地域研究者が、地域のポジティブな面に焦点をあてた研究を蓄積していくことが、開発への接点をみいだせる可能性を秘めているのではないかと思った。

写真 3. 住民、実務者、研究者のディスカッションの様子

フィールドスクールで学んだことが、どのように研究テーマにいかされるか？

私は現在アフリカ在来農業の可能性について研究を進めているが、将来的にその研究の成果を開発実践の計画にまで練り上げ、地域のポテンシャルをいかした農業実践をおこなっていくことも今後の課題としていきたいと思っている。自分の研究分野にとどまらず、他の研究分野や、実務者、そして現地の

人々など、様々な人間と協調し、アフリカのよりよい生活のため、創造実践していくことにも今後挑戦していきたいと考えている。今回のフィールドスクールでは、さまざまな人と意見交換をかさねる上で、多様な視点や立場を参照しながら考察することを学んだ。また、他の研究者、実務者、地域住民との連携をとることの重要性も確認した。そして、何よりも地域研究者として、現地の人々の視点と立場に寄り添い、かつ人々への尊重のこころを忘れずに、研究を進めることの重要性を再認識した。今後の研究の方向性としてはアフリカだけにとどまらず、アジアや世界の発展に寄与できる実践的地域研究を目指していきたい。

写真 4.　挨拶をするピンタリ村の女性

写真 5. チトワン国立公園での演習の様子